

## 『妖怪百談』に見られる

### 不思議庵主井上円了の啓蒙活動について

川崎 ミチコ

#### (一)はじめに

井上円了著『妖怪学講義録』には、四百余种の妖怪の話が集められている。一般に巷に於いて妖怪と云われるものは必ず、「真怪に非ずして、偽怪であり」、「偽怪の敢て驚くに足らざる所以を説き」、それを尚且より普遍化、大衆化する為に「偽怪百談」と題して当時の読売新聞に連載した次第である。これらの偽怪談はいずれも、『妖怪学講義録』を典故としている。

今回ここでは、その「偽怪百談」を一纏にし訂正を加えたところの『妖怪百談』及びその続編である『続妖怪百談』を用い、円了が言わんとするところの「偽怪信ずべからず」の実例を挙げ、当時の啓蒙活動の一端を紹介しようと思う。

## (二) 『通俗絵入正・続妖怪百談』

ここでは『妖怪百談』及び『続妖怪百談』についてその内容を概述する。

はじめに『妖怪百談』について述べることにする。

『妖怪百談』は一名『偽経百談』といい、不思議庵主井上円了輯と記されている。この書が何如なる内容であるかを明確にする為に、井上円了氏の緒言を次に挙げてみることにする。尚、原文にはルビが打たれているが、ここではその全てを省略するものとする。

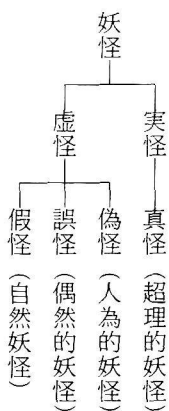
### 緒言

余先年古今の書籍を搜り、東西の学説に考へ、四百余种の妖怪を集め来りて之に一一説明を與へ、兩三年前其全部を編纂して、世に公にするに至れり、之を妖怪学講義録と名く、其中には実怪あり、虚怪あり、偽怪あり、誤怪あり、仮怪あり、真怪あり、人為的妖怪之を偽怪と名け、偶然的妖怪之を誤怪と名け、自然的妖怪之を仮怪と名け、超理的妖怪之を真怪と名く、是れ横的分類なり、若し縦的分類に依らば、総論、理学部門、医学部門、純正哲学部門、心理学部門、宗教学部門、教育学部門、雑部門の八大科となる、而して今余か妖怪百談一名偽怪百談と題して、此に蒐録する所は、横的分類に従ひ、妖怪学講義録中より偽怪誤怪の種類に関する例証を抜抄せるものなれば、之を妖怪百談と称するより寧ろ偽怪百談と名くるを適當となす、蓋し妖怪百談は総名にして、偽怪百談は別名なり、然るに世の妖怪は十中八九迄偽怪より成るを以て、此に偽怪百談を題して妖怪百談と名けり、今若し偽怪百談を結了するを得ば、他日更に妖怪学講義録中より真怪の種類を抄出して、真怪

百談を編輯すべし、

世人或は余を目して極端の妖怪排斥家となすも、余は寧ろ極端の妖怪主唱者にして、世界万有悉く妖怪なりと固執するものなり、唯余か世人と其見を異にするは、從來一般に認めて妖怪となすものは、真の妖怪にあらずして偽妖怪なり、而して真の妖怪は、世人の全く知らざる所にありて存すへしと云ふにあり、

夫れ鏡面の塵を払はずんば、其真相を認むるを得ず、月下の雲を払はずんば、其清光に接するを得ざるか如く、偽怪の妄を排せずんば、真怪の実を顕はすを得ず、是に於て真怪百談に先ちて、偽怪百談を編成するに至れり、故に偽怪百談を読むもの、誤りて余を消極一方の破壊論者となす勿れ、余は一方に於て消極的に破壊するも、他方に於て積極的に建設せんことを期す、人若し其実を知らんと欲せば、請ふ真怪百談の出づるを待て、以上が『妖怪百談』の緒言の全文である。実に端的に、明確に「妖怪」を分類している。



つまり、右図の如くの理解が成り立つと考える。又、偽怪を更に細分化するならば、政略的偽怪・利己的偽怪・好奇的偽怪等を挙げることができる。

『妖怪百談』では、その書名が示す如く、百の話、つまり妖怪出現の話が語られ、その全妖怪譚に対し、その全てを虚怪とし、偽怪・誤怪・假怪・迷信等に分類して、全く信するに足らないものである旨を主張しているわけである。百の妖怪譚の次には、加藤弘之・内藤恥叟・依田百川・関根正直四氏の批評文が記され、更に附録と

して井上円了述の「鬼門退治」が続く。これらは明治三十一年に印刷されたらしく、目次末尾には「明治卅一年一月」と記されている。次には、百種の妖怪譚の題名及び、その出典であるところの『妖怪学講義録』の科の分類名を（ ）内に附してみることにする。

- 第一談 天狗の奇話（妖講心理学第三十八節参看）——人怪  
第二談 西方塞がり（妖講純正哲学三百二十一頁引用）——迷信  
第三談 英雄の方便（妖講雑部第一節参看）——政略的偽怪  
第四段 疑心生暗鬼（妖講宗教学第一節参看）——人の心より出づるもの、  
第五談 山間の呼声（妖講総論第百三節参看）——幻聴より生ずるもの、  
第六談 死体の衄血（妖講医学二十六頁引用）——妄説  
第七談 爐中の菌怪（妖講理学第三十二節参看）——草木の怪（怪とするに足らざるもの）  
第八談 御札天より降る（妖講理学部門第五十七節）——人為、  
第九段 本来無東西（妖講純正哲学第四十四節参看）——迷い  
第十談 五行の妄説（妖講純正哲学五十九頁引用）——不道理の極み  
第十一談 夜有鬼物（妖講総論第百一節参看）——幻覚  
第十二談 幽霊の幻覚（妖講心理学第四節参看）——急性幻覚性妄想  
第十三談 日月の変光（妖講純正哲学第二十一節参看）——外象の変幻（視る側の感覺精神の状態による）  
第十四談 婚礼及び正月の縁起（妖講教育学四十三頁引用）——儀式の縁起は大抵皆迷信の一種に過ぎず、縦

令儀式は迷信より出つるも、別に利害のなきことなれば、成るべく古来の習慣を守るをよしとす

第十五談 雪は豊年の瑞（妖講純正哲学百二十頁引用）——自然現象

第十六談 時日に吉凶なし（妖講純正哲学百九十八頁引用）——俗間の妄説

第十七談 盗難除の御札と賽銭箱の鍵（妖講宗教学第四十七節参看）——自家撞着

第十八談 民間の狐狸談信憑し難し（妖講心理学百七十一頁引用）——無根虚構（古来の狐狸談は多く狐狸其

物の人を誑かすにあらざして、人の人を誑かすものなるを知るべし）

第十九談 神猶ほ人間に使用せらる（妖講雑部第一節参看）——利己的偽怪

第二十談 投石の怪（妖講雑部十四頁引用）——人為

第二十一談 精神作用の影響（妖講心理学第六節参看）——精神作用の肉体の上に影響する例

第二十二談 人相見に就きての疑念（妖講純正哲学第四十五節参看）——策略

第二十三談 鬼門の方角違ひ（妖講純正哲学第五十七節参看）——妄説

第二十四談 読経の功德（妖講純正哲学二十七頁引用）——偶然の出来事（豈之を讀経の功德と云ふを得ん

や）

第二十五談 妖由人興（妖講総論十六頁引用）——故に世の迷信家は先つ其心を治むることを勉むべし

第二十六談 精神と病勢との関係（妖講医学第七節参看）——諺に薬人を殺さず、医師人を殺すと、病にかゝ

るものは医師を扱ばざるべからず

第二十七談 火渡の効験（妖講雑部第十七節参看）——山伏の秘術は気の弱きものに効験ありて、強きものに

効験なし

第二十八談 利己的偽怪（妖講雜部三頁引用）——妖怪と云ふは狐狸の類よりは、人の所為こそ多きなるべし、是に由て世間の妖怪の信じ難きを知るべし

第二十九談 稻荷下しの拘引（妖講雜部第一節參看）——悪奸

第三十談 陰陽師身の上知らず（妖講純正哲学第一節參看）——何ぞ其術を己れの身に実施せざるや

第三十一談 眉毛に唾を塗る事（妖講心理学第二十九節參看）——後俗のなし始めし事ならん

第三十二談 癩の妖（妖講理学百九十頁引用）——人死して又来るの理あらんや、魂魄来るとも人間の如くならじ、狐狸などの所為か、多くは人の所為なるべし、世に妖怪多きは、蓋し其源を究めざるに由る、若し之を究めば、必ず此の如き例多からん

第三十三談 白狐蠶兒を盗む（妖講心理学第三十九節參看）——斯奇獸は余某地に於て見しことあれとも、蠶の失せる原因を之に帰するは信すべからず、寧ろ其原因を鼠若しくは人為に帰する方稍信すべし

第三十四談 髮切虫の怪（妖講医学百二十九頁引用）——俗説に依れば、或は老狐の所為なりと、或は一種の虫なりと云ふも、皆妄説にして考ふるに足らず、先年佐々木政次郎氏は之を一種の疾病と鑑定せられたり、其証跡及理由は余り長ければ此に掲げず、宜しく医学雑誌に就きて一読すべし、斯くして己に髮切は一種の病的なるを知らば、理学の道理によりて説明するを得べく、從て復た妖怪とするに足らざるや明かなり

第三十五談 屍体の強直（妖講医学二十七頁引用）——生理学的理由による（宜しく生理書に就きて見るべし）

第三十六談 幽霊の誤覚（妖講宗教学二頁引用）——誤怪の一種にして、其実妖怪にあらざるものを認めて妖怪となすものなり

- 第三十七談 余の実験せし妖怪（妖講雜部六十七頁引用）——音響光線の妖怪現出の媒介となること此の如し
- 第三十八談 哲学館の火災（妖講純正哲学第五十七節参看）——哲学館の焼失と鬼門とは全く関係なきこと明かなり
- 第三十九談 鬼門の妄説（妖講純正哲学第五十七節参看）——日本中世より云出す処の鬼と云もの、此悪鬼をさすものなり、
- 第四十談 祥瑞は信するに足らず（妖講純正哲学百二十頁引用）——何ぞ一二の物象に就きて吉を論するを要せんや
- 第四十一談 夜中大怪物を捕ふ（妖講雜部六十八頁引用）——（炭俵を怪物と見誤り、それとわかりて自ら吹き出した話）
- 第四十二談 回向院の幽霊（妖講宗教第十三節参看）——誤怪（如何に恐ろしき幽霊も、正体が分れば大笑となる）
- 第四十三談 臆病は姪怪の種因（妖講総論第七十七節参看）——臆病より呼び起す幻覚は幾多あるを知らず、故に臆病は妖怪の種因と知るべし
- 第四十四談 「コックリ」（狐狗狸）の名義（妖講心理学二百九十四頁引用）——西洋の所謂「テーブル・トルニング」なれば、固より狐狸天狗の所為にあらざること明かなり
- 第四十五談 御伺の石（妖講心理学附講三十頁引用）——我人の精神作用より起るものにして、敢て怪むに足らざるなり
- 第四十六談 八幡知らず（妖講理学百八十四頁引用）——精神の作用といふより外に説明の道なけん

第四十七談 老樹の怒鳴（妖講心理学第四節參看）——多くは樹其物の怒鳴にあらずして、其体内に住する禽獸動物の發声なること明かなり、

第四十八談 日本中大神最も多き場処（妖講総論五十八頁引用）——小学教育と大神若くは狐憑とは、全く反比例を為し、二者両立すること能はざるを知るへし、果して然らば教育の功力も亦偉なる哉

第四十九談 老僕自ら狐惑を招く（妖講心理学第三十四節參看）——其実老狐の所為にあらずして、自ら之を懼るゝの余りの所為なり、

第五十談 易占を掛念して自殺を計る（妖講純正哲学第二十七節參看）——迷信の害ある一例

第五十一談 天変は人事に關係なし（妖講純正哲学百十五頁引用）——民間の俗説を説破するの参考となすに足る

第五十二談 偶合は敢て奇怪とするに足らず（妖講純正哲学二十六頁引用）——世の愚民は此の如く凶事の引き続く場合には、必ず種々の縁起を附会するを常とす

第五十三談 恐情と醉眼より生じたる誤怪（妖講宗教学六頁引用）

第五十四談 地藏尊の変位（妖講雜部五頁引用）——好奇的偽怪

第五十五談 不動金縛（妖講雜部第十八節參看）——余再三催眠術を施せるものが不動金縛を行ひしを見たり、若し之を催眠術とすれば、心理学上説明するを得べく、従て奇怪とするに足らざるなり

第五十六談 二十六夜（妖講理学第六節參看）——是れ尤の説なり

第五十七談 我邦の「ブロッケン」山（妖講理学五十五頁引用）——怪に非ず自然現象なり

第五十八談 欠伸の説明（妖講総論第七十一節參看）——精神に反射作用と联合作用あることを以てする



第五十九談 屍体に毛髪長生する事（妖講医学二十五頁引用）——今日愚民の間には、此の如き屍体の迷信を固執するもの尚ほ多きは、嘆すべきの至りなり

第六十談 神仏の靈驗（妖講宗教学三百十七頁引用）——神仏の靈驗はすべて精神作用より起ると云ふも、亦多少物理上の原因なきにあらず

第六十一談 地獄の畫（妖講宗教学九十三頁引用）——地獄の説最初より此の如く奇怪なるにあらず、後の人附会を重ねて、遂に妄誕を極むるに至れり

第六十二談 人為誤りて神異と認めらる（妖講宗教学七頁引用）——世間の所謂不思議中には此の如き人為的妖怪の加はることなしと云ふべからず、凡百の妖怪中より真怪を発見するは豈難中の難事にあらずや

第六十三談 山伏の偽怪（妖講雑部第一節参看）——飛礫の原因は遂に狐狸にあらず天狗にあらず、人怪なるを知る

第六十四談 盲筮の的中（妖講純正哲学百七十一頁引用）——余卜筮を知らず、而してよく的中するを得、（中略）余固より卜筮家にあらず、又之を信するものにあらず、故に其卜するや一定の方式によるにあらず、唯自己流によりて猥りに行ひしも、猶ほよく此の如き符号を得る以上は、卜筮の中は敢て驚くに足らざるなり

第六十五談 曆書の妄誕（妖講純正哲学三百二十頁引用）——無稽の妄誕・曲説・大に世間の害をなす、妄誕なり。

第六十六談 政略的偽怪（妖講雑部三頁引用）——世所謂英雄豪傑は愚民を籠絡し、人心を収攬せん為に、故らに奇怪なる現象を作爲せるものなり

第六十七談 鬼髪束針の怪（妖講雑部七頁引用）——偶然的妖怪

第六十六談 下谷の怪談（妖講理學第四十九節參看）——偽怪（人の惡戯に出でたるに相違なかるべし、世に惡戯より起りたる妖怪定めて多かるべし）

第六十九談 妖怪の組打（妖講宗教學三頁引用）——余は恐怖と暗黒とは妖怪を産出する母なりと云はんとす  
第七十談 幽霊は見るべからず（妖講心理學宗教學九頁引用）——幽霊は見るべからざるを以て幽霊と名く、若し幽霊にして見るべきものならば宜く顯霊と謂ふべし

第七十一談 雷臍を取ると云ふ事（妖講理學第十二節參看）——自然の經驗より得たるものなれば、敢て怪むに足らざるなり、

第七十二談 為朝龍宮にいたる説（妖講理學第二十七節參看）——龍宮は海外異人の住める孤島の事なるべし  
第七十三談 筑波山の天狗（妖講理學二百六十三頁引用）——誤怪

第七十四談 狸の腹鼓（妖講理學二百三十一頁引用）——誤つて聞いたもの

第七十五談 怪火の原因（妖講理學二百七十五頁引用）——「ポスポル」の光なれば、怪火の怪むに足らざるを知るべし

第七十六談 火柱の話（妖講理學二百九十五頁引用）——人為によるもの

第七十七談 請雨（妖講理學第二十五節參看）——今日の學說に考ふるに、山神の力を假らざるも、多人数にて高山を跋涉すれば自然に氣象の上に変化を起し、雨を降すに至ると云ふ

第七十八談 呪文の効驗（妖講宗教學第四十九節參看）——唱ふる文書に關係せずして、唯一心に之を唱え、人をして癒るに相違なきことを信ぜしむれば、必ず其効驗ありとす、是れ信仰作用の適例なりと、之に準じて愚俗間に行はるゝ種々の禁厭まじな療法の効驗ある所以を知るべし

第七十九談 人凶非宅凶（妖講雜部六十六頁）——凶事も吉事も多く人より生じて、妖も怪も皆人心より起るを知るへし

第八十談 鬼門の吉凶（妖講純正哲学三百十頁引用）——とるに足らない迷信（是れ迷信家の一読すべき文章なり）

第八十一談 迷信の為に數百金を失ふ（妖講純正哲学第六十四節參看）——迷信の害

第八十二談 筮者の遁辭（妖講純正哲学百七十三頁引用）——卜筮家の説明には、固より作為せる虚談が多い。

第八十三談 射利的偽怪（妖講雜部四頁引用）——詐欺手段により、神仏に托して種々の不思議を偽造

第八十四談 衣類の切断（妖講雜部第五節參看）——俗間にては此の如き怪事あれば、直ちに狐狸の所為となすも、多くは人為にして婦人兒童若くは愚鈍者の所為に出ること多し

第八十五談 誤怪の一話（妖講總論七十頁引用）——偶然に起れる妖怪の一例

第八十六談 犬鴉の前知（妖講純正哲学百二十一頁引用）——犬鴉の鳴くは人間の死に直接の關係あるにあらずして、人の死すべき氣候天氣に關係を有するなるべし

第八十七談 七不思議（妖講理学百七十七頁引用）——多くは氣象地味より生ずる變化に外ならず、故に今日にありては敢て怪とするに足らず

第八十八談 「カマイタチ」の怪（妖講理学三百四十三頁引用）——其説明に就ては今日一般に唱ふる所によれば、空氣の變動によりて空氣中に真空を生じ、若し人体の一部其場所に触るゝときは、外部の氣壓を失ふより、人体内部の氣の外部に迸発せんとして吾が皮肉を破裂せしむるものなりと云ふ、

第八十九談 幻々居士の靈符（妖講宗教学第四十七節參看）——居士の名刺よく人の病を治するの力ありとは

豈不思議ならずや、是れ精神作用にあらずして何ぞや

第九十談 武士瓢箪を斬る（妖講宗教学四頁引用）——誤怪（世に此種の妖怪殊に多きは余か辯を待たず）

第九十一談 咒術は今日の催眠術（妖講雑部第十九節）——古来魔法咒術と名くるものあり、人皆奇怪となせしが、今日之を視るに一種の催眠術なれば敢て怪むに足らず

第九十二談 人相術の批評（妖講純正哲学二百七十八頁引用）——長短大小善悪形相は吉凶にあらざるなり、実に卓見と謂ふべし、余は我国民に対して支那愚民の迷信を崇拜せずして、孔子荀子の如き聖賢の金言を遵守せられんことを望む

第九十三談 月の大小（妖講総論二百五十九頁引用）——目には変覚幻覚妄覚等ありて、実物を誤り認むること少からず、

第九十四談 精神作用の影響（妖講医学第二十四節参看）——精神によりて病気を起すことあり、又治することあり、世に其例甚だ多し

第九十五談 夢は多く感覚より起る（妖講心理学第五十四頁引用）——古代は夢を以て不思議の一種となせしも、今日は心理学の研究によりて毫も不思議とするに足らざるを知るに至る

第九十六談 惑病同源論（妖講医学第二十四節参看）

第九十七談 仏教は吉日良辰を択ばず（妖講純正哲学三百三十五頁引用）——仏教中には往々吉日良辰の択ぶに足らざることを説けり、（孔子は怪力乱神を語らすと云ふ、釈迦も孔子も其致一なり）

第九十八談 卜筮は聖人の製作にあらず（妖講純正哲学二百二十七頁引用）

第九十九談 蒲生翁の妖怪（妖講雑部第一節参看）——偽怪の一種であるものをも計へ来らば、人間社会盡く

妖怪となるべし

第百談 天地万有悉皆妖怪（妖講総論第十九節参看）——蒲生翁は人間社会盡く妖怪なりとなす、余は独り人間社会のみならず天地萬物悉く妖怪なりとなす、（中略）而して一切皆妖怪の説は余は真怪百談に入りて証明せんと欲す、

以上が『妖怪百談』の百話全てについての各タイトル及び『妖怪学講義録』の該当頁、そして円了不思議庵主の各話についてのコメントを略記したものである。中でも「鬼門」に関わる記載が四つもあったので、それらの全文を挙げ、更に『妖怪百談』附録にある「鬼門論」を参考にして、円了氏の「鬼門」に対する考えを明確にしてみた。

(1) 鬼門に関わる記載

(1) 第二十三談 鬼門の方角違ひ

民間にて迷信せる鬼門の妄説なることは、数書に見る所なるが、本朝俚諺に左の如く記せり、

神異経云、東北有<sub>二</sub>鬼星石室三百戸<sub>一</sub>、共一門題曰<sub>二</sub>鬼門<sub>一</sub>、広異記云、東海度朔山有<sub>二</sub>大桃樹<sub>一</sub>、蟠屈三千里、其東北曰<sub>二</sub>鬼門<sub>一</sub>、事文類聚云、交趾有<sub>二</sub>鬼門関<sub>一</sub>、其南多<sub>二</sub>瘴癘<sub>一</sub>、去者罕<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>生還<sub>一</sub>、韻府云、諺曰若度<sub>二</sub>鬼門関<sub>一</sub>、十去九不還、

是等の説をきき、あやまりて日本の事とし、東北のすみを鬼門と覚えたる人おほし、鬼門関とは交趾にある所の名なり、交趾は今の安南国なり、此鬼門といふところ甚しき湿地にて、ゆくものかならず病いだして、十に九つは死したるとかや、此故に鬼門にゆくことを甚だ嫌へり、日本にて忌思ふは、俗にいふ方角違なるべし。是れ鬼門を日本にて談するは、方角違なりとの説なり、

## (2) 第三十八談 哲学館の火災

昨年十二月余が鬼門退治と題したる一篇の論文を二三の新聞に掲載せしことあり、其文中に吾家は鬼門に向けて再三増築せしものなれば、之を鬼門三度破りの家と名く云云の一段あり、世人此段を讀みて数日を出てさるに、忽ち哲学館の焼失に会せり、依て遠近説を爲して云く、哲学館の焼失は正く鬼門の祟なれば、鬼門は決して犯すべからずと、却て鬼門迷信家に迷信の兵糧を與ふることゝなれり、然るに当日の実状は全く之に反せる次第なれば、一言以て世人の誤解を弁明せざるを得ず、先つ当夕火を発したるは郁文館にして哲学館にあらず、啓学館は郁文館に隣近せるを以て、類焼の不幸に会したるのみ、且つ所謂鬼門三度破りの家は、依然として火災を免かれ、鬼門に触れざる哲学館校舍及寄宿舎は空く烏有に帰せり、此事實に依て考ふれば、哲学館の焼失と鬼門とは全く関係なきこと明かなり、

## (3) 第三十九談 鬼門の妄説

鬼門の妄説は余独り之を唱ふるにあらず、山片子蘭の無鬼論辨の中に左の如く論せり  
史記黃帝本紀云、萬物和而鬼神山川封禪與爲<sub>レ</sub>多焉、これ鬼神を云ふの始也、同顯項本紀曰、依<sub>レ</sub>鬼神<sub>レ</sub>以制<sub>レ</sub>義、これみな山川の神を云也、同注云、海外經引云、東海中有<sub>レ</sub>山焉、名曰<sub>レ</sub>度索<sub>一</sub>、上有<sub>レ</sub>大桃樹<sub>一</sub>、屈蟠三千里、東北有門、名曰<sub>レ</sub>鬼門<sub>一</sub>、萬鬼所<sub>レ</sub>聚也、天帝使<sub>レ</sub>神人<sub>二</sub>守<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、一名鬱壘主<sub>レ</sub>閔領<sub>レ</sub>萬鬼<sub>一</sub>、若害<sub>レ</sub>人之鬼、以<sub>レ</sub>韋索<sub>二</sub>縛<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>、射以<sub>レ</sub>桃弧<sub>一</sub>、投<sub>レ</sub>虎食<sub>一</sub>也、これは仏家の惡鬼に似たり、桓武帝の時最澄なる僧この鬼門の説を取て、王城の鬼門を守ると嘗りて叡山を開く、この鬼門は桃樹の東北也、是を我邦の王城に用ゆべきに非る也、其餘山海經、列仙傳、三才圖會、訓蒙圖彙の如きは、皆仏道家の述る所にして、怪談妄説冊にあぐる聖賢の書と同日に語るべからず、日本中世より云出す処の鬼と云もの、此惡鬼をさすものなり、

是に由て鬼門の妄説たるを了すへし

(4) 第八十談 鬼門の吉凶

鬼門の吉凶に關し、古今百物語評判に左の如く論せり

鬼門と云ふ事は東方朔か神異經に、東方度朔の山に大なる桃の木あり、其下に神あり、其名を神荼鬱壘と云て、もろくの悪鬼の人に害をなす物をつかさどり給へり、故に其山の方を鬼門といふと見へたり、かくはいへども是まさしき聖賢の書に出るにもあらず、其うへその書にも鬼門をいむといふこと見へ待らず、元より我朝のならばしに丑寅の方を専らいむ事、何れの御時よりはじまれりともさだかならず(中略)、たとひ鬼門へむきても善事をなさばよかるべく、辰巳へ伺ひても悪事をなさばあしかるべし、猶鬼門にかぎらず、軍家にもてはやしはべる日取時取のよしあしもかくのごとし、悪日たりとも善をなせば、行くさき目出度、善日たりとも悪をなさば、後にわざはひあるべし、又其家々にて用ひ来れる吉例の日もあることに候、むかし周の武王と申す聖人、天下の為に殷の紂王と申す悪人を討給ふに、其首途の日往亡日なりければ、群臣いさめけるよう、けふは往亡日とて往て七ぶる日なれば、曆家に深くいみ候、さ候へは御陣無用のよし申上けるを、太公望きかずしてはいはく、往亡ならば是往きてほろぼす心にて、一段めでたき日なりとて、終に其日陣立して尤も紂王を討ちほろぼし、周の世八百年治まりけり、此故に武王は往亡日をもてさかへ、紂王は往日をもてほろびたり、是れ迷信家の一読すべき文章なり、

(2) 「鬼門論」抜粹

唯此に鬼門の一論を掲げて之

を説破し、其他は妖怪學講義録に譲る、之を此に鬼門退治と云ふ、先づ鬼門の由来を考ふるに支那の俗説より起りたるを明かなり、之を古書中に尋たるに神

異經中に鬼門の事あり、又黃帝宅經の中に鬼門の事あり、又海外經にも鬼門の説あり、今海外經に據るに東海の中に山あり、其名を度索と云ふ、其上に大なる桃樹ありて蟠屈すること三千里なり、其東北に門あり之を鬼門と名く、萬鬼の聚まる所なり、天帝神人をして之を守らしむとあり、是れ支那古代の神話或は俗間の妄説に外ならず、然れども其説相傳へて日本に入り、上下一般に其方位を忌み且つ恐るゝこととなり、其方に向て移轉し或は家作することを厭ひ、就中便所塵塚の類を其方に置くことを固く禁ずるに至れり、古來傳ふる所に由るに比叡山は皇城の鬼門に方るを以て、此に精舎を建てゝ鬼門の防ぎとなし、東都も上野に寛永寺を置きて鬼門の固めとなせりと云ふ、或は支那にては日本を指して鬼門關と稱し、日本にては奥州白川關を指して鬼門關と稱すと云ふ、然り而して此の如き風習の起因に就きて種々の説明あり、陰陽家の説く所に依れば此方角は陰惡の氣の集まる處なれば極めて凶方なりと云ふ、又一説に北方は萬物極まりて又生ずる方なれば、天地の苦む方角なる故之を避くると云ふ、或は古來鬼門を忌み嫌ふは日の出づる方なる故之を尊びて避くるなりと云ふ、或は日本古代の風として狽に家造する時は山林を荒す故に、方角を忌みて伐木



せざらしめたるなりと云ふ、以上の諸説は一も信ずるに足らず、是れ支那古代の神異經或は黃帝宅經に出づる神話に本き、迷信妄想の之を助くるありて次第に傳播して民間一般の風習を成すに至れるなり、約言すれば古代の神話と愚民の迷信と相合して此風習を成すに至れるなり、

是より鬼門の迷信を退治せんには先づ其説の信ずるに足らざる所以を辯明すべし、第一に鬼門の起原は支那古代の神話に過ぎず、而して其神話たるや毫も信ずべき道理あるを見ず、海外經の東海中に山ありとは何れの山を云ふか、山上の桃樹は至て大にして三千里に跨るとあれども誰か之を信ずるものあらんや、其東北に門ありて萬鬼此に聚まると云ふも、其妄誕なること言を待たず、恰も桃太郎の鬼退治の昔話と同一一般なり、如何なる鬼門迷信家と雖も必ず此妄誕を信ずること能はざるべし、且つ其説たるや東海の一孤島の事のみ、何ぞ之を我日本に於て談ずる理あらんや、

第二に其説は支那愚民の信ずる所にして迷信妄想に由りて發達せるものなれば、我國民にして之を奉信するが如きは、支那の愚民を崇拜するものと評して可なり、孔子の如き孟子の如きは支那古代の人物なるも、今日にありては實に世界

の聖賢にして萬國皆之を尊崇す、故に我邦に於て其教を奉信するも決して支那崇拜と云ふべからず、今鬼門の妄説の如きは固より孔孟聖賢の書中に見ざる所にして、却て支那の聖賢の排斥せる所なり、然るに我國民にして聖賢の排斥して愚民の奉信する所の妄説を固守するに於ては、之を愚の極と云はずして何ぞや、殊に一昨年以來我上下擧て支那人を敵視し、且つ之を輕賤せるにも拘らず、其愚民の迷信を神佛の啓示の如く崇拜するは余輩其意を解すること能はず、是れ豈に國民の一大耻辱にあらざるや、

更に之を近代の學說に考ふるに、東北隅の方位の不吉なる理決してあるべからず、地球上には東西南北の別あるも是れ固より假定のみ、若し出で地球外に立たば何れが東西にして何れが南北なるや、若し又地球上に住するも其位置の異なるに従ひ、方位も亦異なり、赤道直下に在るときと北極附近に在るときと

南極附近にある時とは、固より鬼門其物の方位大に異ならざるを得ず、若し正しく北極或は南極の中點に立つときは何れを指して東北隅と定むるを得るや、果して然らば東西南北の方位は假定のものたるに明かなり、然るに假定の方位に對して吉凶を論するが如きは迷信の甚しきものと謂はざるべからず、殊に地球は晝夜廻轉して止まらざるものなれば、東西南北の方位も之と共に時々刻々其方向を轉せざるべからず、前刻の東北隅と後刻の東北隅とは其指す所全く異なるべき理なり、然るに况んや之に對して方位の吉凶を論するをや、之を迷信と云はずして何ぞや、畢竟するに此の如き妄説は古代の地平説に本き、本來方位の確定せるものと信するより起れり、故に其説は今日地球説を信するもの、固より取らざる所なり、

若し假りに一步を譲り方位は一定して動かざるものとし、東北隅は何れの位置にありても變せざるものと許すも、東北隅の方位に限りて不吉なるの理ある可らず、若し東北隅にして凶方ならば西北隅も亦凶方なるべし、又其凶方を犯せば必ず災害ありとする説に至りては一層信じ難し、其方位に鬼神若しくは惡魔の住することを信するより外に其理を解する道なし、之を我邦の上に考ふるに、

其東北隅は北海道にして北海道の東北隅は千島なり、千島の東北隅はペーリ  
ンク海峡を経て遂に北極に達すべし、北海道にも千島にも千島以外にも別に鬼神  
悪魔の住する所あるを見ず、何ぞ之を恐るゝの理あらんや、鬼門説の迷信なる  
こと愈々明かなり、

(「鬼門論」十二〜十三頁)

身に試みんと欲し、殊更に悪方凶位を撰みて之に移轉し或は家作するも、未だ  
何等の凶變の己れの身に起りたるを覺えず、今其一例を擧ぐるに余が住家は八  
年前に新築せし所なるが、殊更に鬼門の方位に向て作れり、故に自ら之を稱し  
て鬼門破りの家と云ふ、其後更に鬼門に向て書齋を増築して自ら之に居り、其  
後又更に鬼門に向て土藏を増築して書類を此に藏む、依て前後三回鬼門を破れ  
り、宜しく之を鬼門三度破りの家と名くべし、爾來既に三年以上経過せるも未  
だ何等の凶災の己れの身上に下るを見ず、鬼門若し果して人に禍害を與ふる力

あるならば、余の如きは五六年前に早く冥土の客とならざるべからず、然るに今尙ほ依然たるは鬼門説の信ずるに足らざる明證なり、獨り家作のみならず、余は旅行轉居等今日迄殊更に凶日凶方を擇びて之に就きしも、未だ何等の凶害の一身上に及びしを檢せず、是れ皆な鬼門方位説の迷信たる所以を證するに足る、

〔鬼門論〕十六〜十七頁

凡そ人の迷信を起すは智識の明かならざると思想の定らざるとにより、之に加ふるに利己心の強きに由らざるはなし、智識明かならざれば吉凶禍福の起る理を辨ずる能はず、思想定らざれば吉凶禍福の爲めに其心を搖さるゝを免れず、而して利己心の之に加はるありて凶を避け福を得んとする慾情禁ずる能はず、斯くして一たび迷ひ二たび迷ひ、再三再四遂に迷海中に沈溺して之を脱する所以を知らざるに至る、若し之を療せんと欲せば、一には百科の學術に依りて知識を進め、二には真正の宗教に依りて信仰を高め、三には高等の道徳に依りて

利己心を制するを要するなり、然れども是れ頗る難事にして一朝一夕の爲し得る所にあらず、是に於て余は直接に迷信を醫する方法を考出せり、即ち世人の最も多く迷ふ所の專柄に就きて一々其理由を説明解釋し、之を一讀するものをして再び迷はざらしめんと欲し、先年來妖怪學講義録を編述せるに至れり、且つ余は己れの田に水を引く様なれども普通教育上に妖怪學の一科を設けて之を小學教育に應用するに如かずと考ふるなり、己に老い去りたるものは積年の間迷に迷を重ねたるものなれば、到底一朝一夕に其迷信を醫し難しと雖も、若し小學兒童に妖怪學の一端を授け、更に中學に於て其全科を授くるに至らば、國民の迷信を拂ひ去りて文明の民たるに耻ぢざる人物を作ることを得べし、余が妖怪學講義の本意も亦其準備の便を與ふるに外ならざるなり

〔鬼門論〕十七〜十九頁

以上が「鬼門」を中心とした迷信に対する井上円了氏の考え方である。当時社会に満ち満ちていた迷信・俗説の類に、汚染されてはならじ、もしくはその汚れを洗い流すべきとの心に燃え、

太政一新已來茲に三十年、其間社會百般の事物皆其面目を改め、之を昔日の日本に比するに殆んど別世界の觀を呈し、其勢東洋の上に雄飛するのみならず、泰西二三の諸國を凌駕せんと欲す、其進歩の速かなること驚くべし、然而して獨り依然として舊色を存し、尙ほ徳川末路の積弊を留め、更に改新の緒に就かざるものは宗教界の實情なり、換言すれば宗教の腐敗と國民の迷信なり、此二者其面目を一變するにあらざれば、焉んぞ世界に對して自ら文明國と誇稱するを得んや、是れ余が毎に我邦明治の大業一半已に成りて一半未だ成らず、第一の維新既に來りて第二の維新未だ來らずと唱ふる所以なり、其今日の文明は諺に所謂頭隠して尻隠さるるが如き觀なき能はず、今や條約改正も大半其局を結び、内地雜居も漸く其期に迫らんとするに當り、宗教の腐敗此の如く國民の迷信彼の如きに於ては、焉ぞ能く外人の歸化を迎へんや、是れ國家の大汚辱にあらざして何ぞや、人あり余に語りて曰く、宗教の雪隠と迷信の下水と此二者の大掃除を爲すにあらざれば、到底内地雜居の新年を迎ふること能はずと、宗教を以て一家の雪隠に比するは稍々酷に過ぐるが如きも、其内部の醜態今日の如く甚しきに於ては、雪隠の不潔と同日に論ぜらるゝも蓋し之に答

ふる辭なかるべし、余は不幸にして明治の維新に後れて長じ、其際一事の國家に盡すことなかりしは、今日に至るも猶ほ遺憾とする所なり、然るに幸にして宗教の革新に先ちて出で、大業の前半己に成りて後半未だ成らざる時に會したるは、自ら其革新の一部分に加はり、聊か微力を國家の爲めに致さんと欲す、是れ余が積年の素志にして數年前より多少心思を其事に注ぎ、他日時機の熟するを待ちて況く社會に訴へ、共に力を協せ能く維新の後半を大成し、以て内地雜居の曉を迎ふる目的なりしが、其時節今既に到來せるを覺ゆ、是に於て愚考の一端を開陳して識者の高評を仰がんと欲す、

と述ぶる如く、啓蒙家たるに足る活動をしていたわけである。彼の著『妖怪百談』に対するいくつかの評文をあげてその当時の井上内円了氏に対する「世の風当り」を記しておくと思う。



## 妖怪百談評語

加藤 弘之

カント曰く吾人は自ら奇怪を造りて自ら之に驚くと井上博士が僞怪と稱するもの即ち是れなり吾人奇怪に眞僞の二種あるを知らず故に眞怪に驚かずして却て僞怪に驚く豈愚ならずや井上博士之を慨歎し眞怪の實に驚くべくして僞怪の敢て驚くに足らざる所以を説き以て吾人の迷信を掃除せんと欲す是れ僞怪百談の著なかるべからざる所以なり其の吾人知識の開發を裨益する決して淺きにあら

全

内藤 耻 叟

我邦妖怪の説あるや舊し、其元古事記日本書紀に始まれり、是實に其事あるにはあらず、唯之を傳ふる者の昏昧なるに由て起れり、夫れ高天原の天上にある、夜見國の地底にある、其他百般の怪事、皆古人敬上の念厚きより、此亘多の妄談をなす者にして、一として、妄想冥信の致す所に非るはなし、然るに、史を作る者之を辨拆することを知らず、亦随つて之を神異にす、姦にあらざるは、或は愚なる也、猶彼邪教の一神を妄想し出し來りて、人を誣惑するに異ならず、

古今東西何んぞ其妖怪談の人に入るとの深きや、果して以て之を解くべからざる歟、曰、然らず、苟くも人をして、其耳目の見聞する所を信じて、其耳目の及ばざる所は、悉是天地の間になき者とす時は、世決して妖怪の談あるとなし、是實は天地の間、もと絶て怪事なきを以て也、唯其見聞の及ばざる所、特に怪事ありとす、是其怪の千生百出して、際涯なき所以なり、夫れ吾國はもと怪事なし、天御中主神以降、天神地祇、皆是在上の人也、故にカミと云ふ、唯其人の功德あり、神聖なるが故に、我民之を崇敬してやまず、終に之を誣るに神怪奇幻を以てするに至るのみ、固より彼儒者の所謂昊天上帝、佛者の所謂如来菩薩の類烏有者と同じからず、然るに、今世の學者、亦惑ふて古史を信じ、祖宗を汚辱して、彼神佛に同じとす、是其妖怪談の大に起る所以也、吾畏友井上君、頃者偽怪百談の著あり、世に妖怪なきの理を辨ず、鑿々として依據あり、明白精密、議論尤も確實なりとす、余深く其辨説の最世人に益あるを信ず、乃ち數言を陳して、以て其卷後に附くと云ふ。

同

依田百川

奇恠妖妄之談無世不有焉。而不獨田夫野老蒙昧之人信之。雖博學宏聞之士。時或遭事物之變。愕然謂。吾親見之。斥爲怪誕非也。遂筆之書。著之論。以傳後世。其惑人也深矣。不知其事物之變者。非理化作用。認幻影於外。則精神昏迷。現想像於內耳。非實有其事物也。井上圓了先生。博聞強識。廣通內外之書。嘗好研究物怪變異數年。謂世信妖怪爲有之。皆非也。因著偽怪百談。據實直書。縷分絲析。瞭如指掌。其言鑿々有證。非如宋儒說空理縱辨駁也。余嘗讀韓文公原鬼by。竊疑高明俊偉如公猶且信鬼。何也。蓋風氣未開。人懼禍福。妖怪之談易入其耳。是賢哲之所以信鬼也。使公讀此書必憬然而悟惜夫。余性迂僻吉凶禍福妖怪之說。盡斥爲妄誕。一日見洋人所演催眠術頗疑之。舉以問君。君爲詳說其術。蓋其人精神昏迷。現想像於內者也。乃知妖怪之果不可信矣。及讀此書。益悟其然。乃題一言。警世妄信妖怪者。

## 關 根 正 直

妖怪變化の物語をかき集めしもの和漢其の類に乏しからず然れども一つも其の妄を辨じたるはなく却りて蛇ヘビに足を添ヒへいよく狐キツネの疑を結ムスばしむるくさはひどぞなりにしこれら多くは佛家道家のわざなるこそうたてられさすが儒家といはるゝ人の怪しきを語らざるはさることながら進みてその妄を斷じ妖を破らむとせしは希なるに井上博士の懇なる志を以て年ごろ人の惑をとき世のわざはひを除かむとつとめらるゝ功德の程豈淺からめや

又おもふに近古經學に精しき儒者の修身齊家の旨を和解し假名文にかきあらはして人をさとしゝが多かりき其の書は一見卑俗なるが如くなれど世を益せしといふべくもあらず然るに其後の儒者たち専ら文辭の雕琢に耽るあり經義に異説を立つるもあり或は折衷といひ考證と唱へ學はすなはち高尚に進みたれどもまき新奇に誇り博覽を街ふ風となりて遂に昔日の通俗的敎訓書はあとをたつに至りにき井上博士が此の著はかの敎訓書の類には異なれども事を凡近にとりて博く衆人を敎化する趣またやゝ似たる所ありなまじひに幽玄の道高妙の理を説きて意氣雲表に昇らむよりは卑近の言によりて普く人智を開かむとせらるゝこそ世に益あるはごなりけれど感じ思ひけるまゝをかき添へたるは